

# 07 福井県高浜町 6次産業化と観光振興によるまちの魅力向上と関係人口創出

What ▶ #観光 #農林水産業 #移住・関係人口



左から株式会社まちから 常務取締役の河合 徹さん、高浜町 産業振興課の中村 広花さん、株式会社まちから 代表取締役の名里 裕介さん、高浜町 総合政策課の野村 つとむさん。「UMIKARA」のテラスで。

## お話を伺った方々

**地域再生マネージャー**  
株式会社 ATソリューションズ  
なごめ すずむ  
会長 中込 進さん

**行政**  
高浜町 総合政策課  
のむら  
野村 つとむさん  
高浜町 産業振興課  
なかむら ひろか  
中村 広花さん

**民間**  
株式会社 まちから  
なざと ゆうすけ  
代表取締役 名里 裕介さん  
かわい とおる  
常務取締役 河合 徹さん  
ブルーフラッグアカデミー+  
ながの ゆか  
永野 由佳さん

## 6次産業化×観光で挑む海の賑わいの再生

かつては「海水浴のまち」として知られた福井県高浜町。10年以上にわたって「海の6次産業化」に取り組んできた結果、今では全国から視察に訪れる人が絶えない。地域再生マネージャー事業として推進した6次産業化と観光コンテンツ強化が相乗効果を生み、事業終了後も交流人口・関係人口の創出に繋がっている。

### 課題

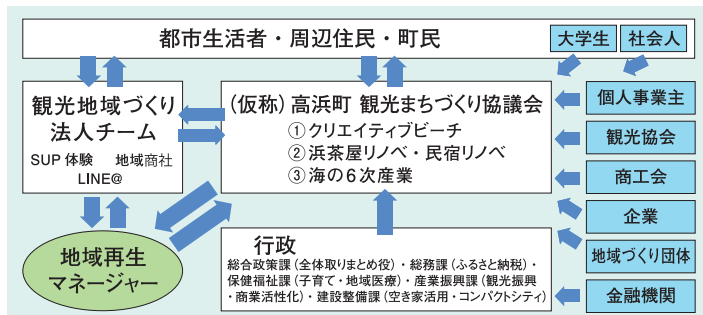
高浜町は「海水浴のまち」として知られ、かつては民宿の収容力日本一を誇った。しかし、海水浴客は1975年頃の約120万人をピークに減少し、2015年度には6分の1に。一方で「原発のまち」のイメージが強まりつつある中、原発に依存しない町への転換を図ろうと、2016年4月にアジアで初めてビーチおよびマリナーの国際環境認証ブルーフラッグを取得。ビーチを含め海辺を軸とした「海の6次産業化」によるまちづくりの可能性を模索してきた。

### 目的

町は2009年度からまちづくりの「フェーズI」としてコンパクトシティ構想に取り組んできた。2015年度には地方小都市での次世代スマートシティを目指す「フェーズII」に移行。本事業では「フェーズIII」の「サステナブルタウン」実現のため、地域住民および民間主体の実行体制づくり、地域資源を活用した産業育成を目指した。具体的には海水浴以外のアクティビティを提供できる環境整備、海の6次産業化、地域商社の導入を目標とした。

## 地域再生マネージャー事業 実施期間(2018年度)

### 事業実施体制



高浜町観光まちづくり協議会を設置し、町や町内外の大学生、地域住民が同じ「参加者」という立場で関わりながら、事業化を目指した。各参加者がひとつずつ自発的に取り組むプロジェクトが「自立自走」していくことを目指し、地域再生マネージャーの中込 進さんが中心となって、方向性の提案、マッチング、事業性のアドバイスなどの支援を実施した。

### ●海の6次産業化施設の開業に向けた準備

#### What — 何をしたのか？

賑わい創出を牽引する事業として、「海の6次産業施設」を構想。海産物を中心に揃えるスーパーマーケット、土産物売り場、新鮮な魚介を楽しめるレストランを備える施設「UMIKARA」の2021年度開業に向けた準備をスタートした。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●環境整備と地域商社立ち上げのための地域の漁師との交渉

「UMIKARA」の施設設計を進めると同時に、建設予定地が漁港であったため土地利用計画の変更を行った。また、まちの魅力を効果的に情報発信していくため、町の職員が出向し、商品企画と販路開拓を担う地域商社の立ち上げ準備を実施。その機能や役割について、地域再生マネージャーのアドバイスを受けながら、代表者の人選やメンバー構成を検討し、事業計画を策定した。「慣れ親しんだ漁港が姿を変えていくと聞いて、当然ながら漁師さんたちからの反発がありました。漁師さんたちが使う漁港なので、『船がつけられなくなるのでは』とか、『風が強かったり、波が高かったらどうする』といった意見や、『自分たちが使う漁港にいろんな人が来て、ゴミが増えたり荒らされたりするのでは』といった不安の声も上がり、最初は反対の意見が多かったのですが、波の高さを調べたり、風の強さ、向きを調べたりと、こうすれば問題が解決ができるということを示し、ようやく全体計画の同意をいただくことができました。理解を得るために漁師さんに何度も会いにいき、仕事を手伝ったり、漁船にも乗ったりと、肩書きや立場を超えた“人対人”の関係を築くことに注力しました」（中村さん）

### ●海の観光コンテンツの魅力を強化

#### What — 何をしたのか？

人気のマリナクティビティ「サップ」、この地で海の家を意味する「浜茶屋」、「民宿」の3つを活用したクリエイティブ事業を実施。関西から参加する大学生たちが企画からデザイン、設営、運営までを担う「学生浜茶屋」や、民宿を活用するイベント「和田 de 路地祭」に加え、SNSなどモバイルを用いたデジタルマーケティングも活用し、情報発信、集客、案内の仕組みを構築した。

#### How — どのようにしたのか？

##### ●学生と地域住民による地域活性化のための企画会議

以前から学生浜茶屋の企画・運営プロジェクトに携わっていた大学生らが、プロジェクト期間中に漁村である塩土地区しおどに滞在。地域活性化のためのアイデアを考え、地域住民に向けたプレゼンと意見交換を実施した。

「当時の活動がきっかけで、大学卒業後も地域に関わり続ける人が多く、のちに高浜町をつくっていく人材の獲得にも繋がったと思います」（河合さん）

##### ●アクティビティ「サップ」のインストラクターの養成、「LINE」のボットで集客の仕組みを構築

サップのインストラクター養成講座を実施し、技術をはじめ、海のコンディションの把握の仕方、事故が起きた場合のレスキュー方法などを指導。10人のインストラクターを養成した。また、「LINE」のボット機能を用いてスマートフォンでパンフレットを閲覧できる「PLAY! TAKAHAMA BOT」を開始し、サップ体験や「学生浜茶屋」などのコンテンツの情報発信・集客の仕組みを構築した。

### ●ブルーフラッグアカデミーの取り組みにより、空き家を賑わいづくりの拠点に

#### What — 何をしたのか？

2016年度から毎年ブルーフラッグ（国際NGO FEEが実施する、ビーチ・マリーナ・観光船舶を対象とした世界で最も歴史ある国際環境認証）を取得している若狭和田ビーチとその周辺のまちを通年で楽しめる観光エリアへと育てるために、海辺の環境保全・教育・体験活動を展開する団体「ブルーフラッグアカデミー」が、まちの賑わい創出のために地域住民の協力を得ながら空き店舗を借り受けて改修。情報発信や海辺の賑わいづくりの拠点を整備した。

## How —どのようにしたのか？

### ● 1年間限定のカフェを運営

将来的には地域住民に引き継ぐことを目指して、2018年4月から1年間限定のカフェ「Blue Cafe」をオープン。カフェの営業だけでなく、ブルーフラッグアカデミーの環境教育活動の一環として、クリーンイベントなどとも連動し、ビーチで拾ったプラスチックごみでアクセサリーを作るワークショップなどを実施。ブルーフラッグの認証を受けたビーチの価値と必要性を再認識させる拠点ともなった。

「地域活動などのミーティングの場としても活用したほか、外国人観光客が民宿にチェックインする際のフロント機能を兼ねるなど、地域活性化の拠点として活用されました」（野村さん）

## 主な成果

### ● 多角的展開で収益向上と体制強化を実現

海の6次産業施設「UMIKARA」を巡っては、課題点の洗い出しや解決のため、関係者間で幾度となく議論がなされた。そうしたプロセスを経て、チームの一体感が醸成されていった。

サップインストラクターの養成でマリンアクティビティの受け入れ体制拡充に成功。「PLAY! TAKAHAMA BOT」は、サービスを開始した夏の期間だけで「友だち」2,500人以上を獲得し、情報発信と集客、学生浜茶屋の売上増にも貢献した。また、2018年度の海水浴客の数は前年比8,300人増の19万6,400人となり、学生浜茶屋の売上も前年比133%と増加した。

1年限定で始めた「Blue Cafe」は、高浜町へのUターン者への引き継ぎが決まり、事業実施期間が終了した翌年には同じ場所でイタリアンレストランがオープン。隣接するスペースでは、ワークショップをはじめとした環境教育活動も継続的に行われている。



(上) 若狭和田ビーチ。(下) ビーチのすぐそばにある活動拠点「ブルーフラッグアカデミー+」と永野由佳さん。

## 地域再生マネージャーコメント



株式会社 ATソリューションズ 会長 中込 進さん

### “着実に育ってきた若手リーダーを引き続きサポートしたい”

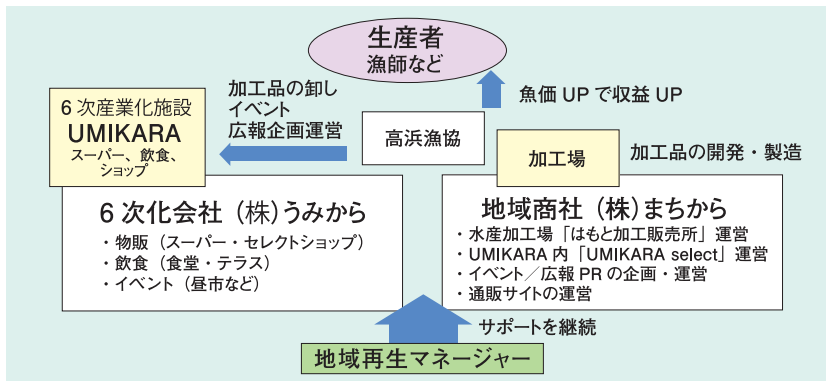
地域商社の機能や役割についてミーティングを重ねながら検討しました。事業期間の翌年には、地域商社として「株式会社まちから」を設立し、加工・販売事業を担う「はもと加工販売所」をオープン。2021年7月には6次産業施設「UMIKARA」が開業し、ここで6次化の体制を確立できました。事業終了後も定期的に高浜町を訪れては、各事業の経営者に対して、事業の生産性およびマネジメントの向上について指導してきました。今後は、海の6次化による水産業の振興と、観光業の拡大の両方を同時に推し進めていく必要があります。日本のどの地域にも「変化を好まない」「現状のままで良い」というスタンスが必ず存在しますが、その状況を突破するためには若い人たちのエネルギーが欠かせません。高浜町でこの数年を通して着実に育ってきた地域の若手リーダーたちが、引き続き中心となって活躍することを期待していますし、私も引き続きサポートしていくつもりです。

#### PROFILE

1952年東京生まれ。東京外国語大学卒業、ニューヨーク大学修士。大手都市銀行、株式会社カフェ・カンパニー副社長を経て、2014年より現職。官公庁の多くの事業にプロデューサーやアドバイザーとして携わっている。

# 地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2019年度以降)

## 事業実施体制



市場から仕入れた魚を地域商社「株式会社まちから」が加工し、「UMIKARA」で販売する体制を確立。町から漁協や地域商社に課長級の職員が出向し、官民一体となって海の6次産業化を進めている。地域再生マネージャーの中込さんは定期的に町を訪れて、事業者に対し生産性やマネジメントについて指導を行ったり、地域プレイヤーの活動にアドバイスを行っている。

## 事業実施内容

### ● 6次産業化の推進に向けて地域商社と加工場を立ち上げ

#### What — 何をしたのか？

2021年7月に海の6次産業施設“魚と旅するマーケット”「UMIKARA」を開業。並行して周囲には加工販売所、荷捌き施設、出荷選別施設などを整備し、2023年8月にはエリア一帯を「たらふく市場」としてグランドオープンさせた。

#### How — どのようにしたのか？

##### ● 加工を地域商社「株式会社まちから」が引き継ぎ、6次化を支える体制を確立

「UMIKARA」開業に先駆け、2019年6月に地域商社「株式会社まちから」を設立し、高浜漁港の加工場を「はもと加工販売所」としてリニューアル。同じエリア内で水揚げから加工・販売まで行う体制が整った。

「地場の加工事業は長らく採算の厳しい状態が続いていました。そこで、『株式会社まちから』を立ち上げ、新しいものを開発しつつ、歴史ある味は残していこうというところから始めました。漁師の奥さんたちも、獲れたときだけ加工所に来るという形で働く方が多かったのですが、まずは雇用を確保して、漁家収入を上げていくための場所を目指しました」(中村さん)

### ● 高浜町を持続的に盛り上げていく関係人口の創出

#### What — 何をしたのか？

町内外の若者と学生が2020年度に「明日あったらいいな」と思うものを実現していくプロジェクト集団「高濱明日研究所<sup>たかはまあすけんきゅうじょ</sup>」を発足させた。またブルーフラッグの価値を持続させ、町の魅力発信に繋げるため、民間主導の動きによって、観光コンテンツ拡充の取り組みが加速した。

#### How — どのようにしたのか？

##### ● 新組織発足・既存組織の改変による取り組みの多様化

「学生浜茶屋」に関わった学生のアイデアは「高濱明日研究所」へと発展し、音楽フェスや野外上映、空き家の改修といった多様な取り組みを推進。内外の人が楽しめるコンテンツを通じて交流人口・関係人口の創出にも寄与している。さらに活動は「コードモノ明日研究所」へと広がり、世代を超えて町の未来を考え、行動する意識を育む機会を多世代に提供している。また、ブルーフラッグアカデミーも2024年度に「ブルーフラッグアカデミー+」としてリニューアルされるなど、事業実施期間中の取り組みは継続的に発展している。

「有志によるビーチクリーンの活動は、2018年度から現在まで、雨の日も雪の日も毎月欠かさず継続しています。地元の方はもちろん、他府県の人たちもいつも遊んでいる海に恩返しする気持ちで積極的に参加してくれて、大きな力になっています」(永野さん) 2016年4月の取得以来、更新を続けているブルーフラッグ認証。その誇りを皆で磨き上げ、町をもっと魅力的にしていこうという気持ちが、多様な取り組みのモチベーションになっている。

## ●ワーケーションプログラムの実施

2021年度より京都の大学生を対象に、「教育」と「ワーケーション」を連動させる「Edu ワーケーション」の実証実験を実施。1次産業を体験するワーケーションを通じた人材育成プログラム「TUNAGU プロジェクト」は関係人口創出にも繋がっている。「プロジェクトに関わったことをきっかけに漁業に興味を抱き、漁師になる修業をしている若者もいます。多彩な関わりしろがあることで、想定していなかった成果も生まれてきています」（野村さん）

## 主な成果

### ●地域資源を活用した稼ぐ基盤整備

漁港エリア内で水揚げから加工・販売までが繋がったことで、地域内で付加価値を生み出す環境が整い、漁家収入の拡大にも繋がった。あわせて、低未利用魚を活用した水産加工品の開発など、資源の有効活用と付加価値化が進捗し、地域資源を「稼ぐ力」へ転換する動きが具体化している。「UMIKARA」は開業3年目で黒字化を達成するなど、経営面でも順調に推移している。これらの動きが高く評価され、2023年度に水産庁「海業振興モデル地区」に選定された。

### ●ブルーフラッグから広がる人材交流

「高濱明日研究所」「ブルーフラッグアカデミー+」など町への「関わりしろ」が増えたことで、町外からの人材流入が増えたこともひとつの成果と言える。

次世代にも影響が波及し、「高濱明日研究所」は2020年度から高浜小学校と連携し「コドモノ明日研究所」を設立。さらに2024年度には、隣接するおおい町の大飯中学校にも「コドモノ明日研究所」が設立され、活動地域が拡大。「ブルーフラッグアカデミー+」は2022年度から和田小学校と連携し、若狭和田ビーチに木製遊歩道を設置する「ゆめロード」プロジェクトなどを展開している。「ブルーフラッグアカデミー+」が毎年夏に開催する「若狭和田ビーチ夏の環境教育イベント」には地域外からも多くの人が訪れており、2024年度には合計161人が海ごみを使ったクラフト体験などに参加した。



「UMIKARA」は、漁港直送の魚介を扱うマーケット、地域特産品のショップ、新鮮食材を使った食堂、海を望むオープンテラスなどで構成される、海の幸に特化した複合型施設となっている。

## 自治体コメント



高浜町 産業振興課 中村 広花さん

### 海業をさらに推進し、魅力を生み続けたい

2012年度に水産振興協議会を立ち上げ、漁港エリアの再整備に向けて協議を重ねてきました。当初は反対意見もありましたが、課題をひとつずつ解決し、事業実施期間の2018年度には全体計画の合意を得ることができました。2023年度に海業振興モデル地区に選定されたことで視察も増え、「海の6次産業化といえば高浜町」という認知も広がっています。今後もこうした取り組みを進めながら、海の恵みを生かした新たな魅力を生み出していきたいですね。

# 取り組みのプロセス

事業の方向性

行政での取り組み

地域での取り組み

成果

成果に繋がったポイント

マネージャー事業実施期間中

## 1年目(2018年度)

海の6次産業化を進めるため、施設の開業準備や地域商社の設立準備を進めた。海の観光コンテンツを強化するため、既存コンテンツの情報発信の仕組みを構築すると同時に、ブルーフラッグアカデミーの活動拠点となるカフェをオープンした。

- 海の6次産業施設の開業準備、商品企画と販路開拓を担う地域商社の設立準備を進めた。
- 海の観光コンテンツを強化するため、情報発信や集客・案内の仕組みを構築した。

- 補助金に頼らない資金調達を目指し、2つの事業でクラウドファンディングに挑戦した。
- ブルーフラッグアカデミーの活動拠点として、和田地区の空き店舗に1年限定のカフェをオープン。

- 6次産業施設の設計、地域商社の設立に向けた事業計画の策定が着実に進み、関係者間で合意形成もなされた。
- モバイルを活用したデジタルマーケティングや人材育成の取り組みによって、海の観光コンテンツの集客力が向上した。

- 漁師・漁協・仲買・小売・町など、利害の異なる水産関係者が同じテーブルで議論を行った。
- 「LINE BOT」を活用し、「サップ」「学生浜茶屋」「民宿」といった既存コンテンツと連動した情報発信を実現した。

マネージャー事業終了後

## 2年目(2019年度)

6次産業施設やその周辺の施設整備を進めながら、地域商社を設立して地産品を活用した商品開発をスタート。ブルーフラッグアカデミーの活動拠点として1年間限定でオープンしたカフェの跡地は移住者が継承し、和田地区での地域活動も継続した。

- 6次産業施設の新築工事、漁港エリアの臨港道路整備工事、上下水道管布設工事を実施。
- 水産庁「浜の活力再生交付金」を活用し、漁港エリアに新しい漁具倉庫を完成させた。

- 地域商社「株式会社まちから」を設立し、農産品も含めた地域産品の開発をスタート。
- 事業実施期間中に和田地区で営業したカフェの跡地を移住者が引き継ぎ、レストランを開業。

- 地域商社が漁港の加工場を「はもと加工販売所」としてリニューアルオープンさせた。
- カフェ跡地がうまく移住者に引き継がれ、町内外から人が集まる人気店となった。

- 漁協の加工事業をスタッフも含めて地域商社が引き継いだことで、雇用の確保や漁家収入の向上を実現した。
- カフェ跡地にできたレストラン+コワーキングスペースが、地域活動やブルーフラッグアカデミーの活動の拠点としても継続的に活用された。

## 3年目(2020年度)

翌年に控えた6次産業施設の開業に向け、ハード整備と並行してメニュー開発やスタッフ育成といったソフト面の整備も進めた。地域では若者が「高濱明日研究所」を発足させ、地元小学校と連携した商品開発プロジェクトなども始まった。

- ハード整備と並行し、6次産業施設開業に向けたメニュー開発やスタッフ育成を進めた。
- 水産庁「水産業競争力強化緊急施設整備事業」として、臨港道路と鮮度保持施設が完成。

- 地域商社のECサイトがオープンし、6次産業施設の開業に先駆けて商品販売を開始した。
- 町内外在住の若者と学生が集まり、プロジェクト集団「高濱明日研究所」を発足させた。

- 地域商社「株式会社まちから」が、農林水産省が主催するサステナワード2020「SDGs賞」を受賞した。
- 「高濱明日研究所」が地元の高浜小学校と連携し、商品開発などのプロジェクトを授業の一環として実施した。

- 低未利用魚の活用についてわかりやすく紹介した動画が評価され、地域商社の「SDGs賞」受賞に繋がった。
- 町内外の人材(関係人口含む)、子どもや若者の主体的なまちづくりが実現した。

## 4年目(2021年度)以降

2021年7月に6次産業施設「UMIKARA」が開業し、2023年8月にはエリア一帯が、観光客が水揚げや競りを見学できるスポット「たらふく市場」としてグランドオープン。多様なプロジェクトやワーケーションを通じて関係人口創出も図った。

- 2021年7月に6次産業施設を開業。2023年8月にはエリア一帯をグランドオープンした。
- 大学生を対象とした「Eduワーケーション」や「一次産業ワーケーション®」を実施した。

- 「高濱明日研究所」が音楽フェスや野外上映シアターなどのイベントを開催した。
- 2024年5月に「ブルーフラッグアカデミー+」がリニューアルオープンした。

- 2023年度に水産庁「海業振興モデル地区」に選定され、2024年度には「浜の活力再生プラン」農林水産大臣賞を受賞した。
- 「高濱明日研究所」や「ブルーフラッグアカデミー+」の継続的な活動が、関係人口創出に好影響をもたらした。

- 漁業、水産物の加工、販売・サービスまで漁港エリア内で行う体制が評価された。
- イベントやプロジェクトが多数実施されたことで町への「関わりしろ」が生まれ、関係人口創出や人材獲得に繋がった。

## 2024年度までの実績

「ブルーフラッグアカデミー+」が7月から8月にかけて、「若狭和田ビーチ夏環境教育イベント」を開催。海ごみを使ったプレスレット作りや海の生き物観察会など、全5回の実施で合計161人の参加者を集めた。この取り組みは毎年恒例となっており、初日にはNHK福井支局の取材が入るなど、地域からの注目を集めている。また、低利用の魚種を活用した水産加工品や6次産業施設における付加価値化の取り組みが評価され、「浜の活力再生プラン」農林水産大臣賞を受賞した。コロナ禍や海岸に接する道路の大規模工事の影響により落ち込んでいた海水浴客数も回復傾向にあり、2024年度には15万2,000人が海水浴に訪れた。